

名誉館長講話実施報告抄

新野直吉*

安藤和風 瀬川清子 中川重春 成田為三 伊藤永之介 佐藤義亮

はじめに

平成14年度は、「先覚記念室」「菅江真澄資料センター」に因む従来の館話を、会場がジョイナスに変更されたことによって講話と改称して12回行った。例によって5月10日（金）安藤和風・5月24日（金）瀬川清子・6月7日（金）中川重春・6月21日（金）成田為三・6月28日（金）伊藤永之介・7月19日（金）佐藤義亮の話を文章化した。

安藤和風

秋田魁新報社長として有名な安藤和風は、慶応2年（1866）1月12日に久保田城下の七軒町に佐竹藩士の父和市と母イクの長男として誕生した。和市は本坂那右衛門の長男として嘉永元年（1848）に生まれたが、家では既に姉に婿を取って家督を継がせ、子供もあつたところに生まれたので、彼は姉夫婦の二男として届出され、のち藩士の安藤儀八郎の養子となった。安藤本家は、あの渡部斧松に100両を貸した程の家で、母イクは刈和野の修験で「菅江真澄遊覧記」にも見える三明院の出であった。貞淑な母はやや放漫な夫の生活ぶりをも超克して家政を守り良妻の聞こえがあつた。

幼名友之助信睦と称した和市は、志賀徳卿に1年だけ師事した程度であつたが、老荘の学に通じ桃ノ木蟻道に俳諧を学び格調ある寡作者であつた。俳諧のことは和風にも重要な意味を持ったと思われる。県官から秋田既決監長になった。

和風は、明治7年（1874）榎山学校一期生として入学する。16年築地学校と合併するのでそれ以後榎山学校はない。12年（1879）県立秋田太平学校中学師範予備科に入学したものの、学資不足のため半年で退学し、川反四丁目にあり白土清忠が塾長である講習学舎の夜学で学んだ。彼らは一番組という上級で、二番組という下の学級もあつた。同じ級に中村緑野がいた。中村は軍医総監にまで

出世するが白土は18年に東京で41歳で死去する。

明治15年（1882）年7月秋田日日新聞に記者として入社したが、11月に秋田日報記者に転じた。日報に大隈重信の報知から主筆として赴任していた犬養木堂が、16年4月27日に米町鶴屋の名妓阿鉄を抱き寝しながら口述する記事を正筆筆記するようなこともあつた。木堂は新潟新聞に移るが、彼は17年に南秋田郡役所に取材し、改名に関して「先祖の名乗りの字を入れれば改名許可される」という特種報道をした。改名流行の気が表れた由であるが、自身も17年3月に「のぶゆき国之助信順」という幼名を改め父の和の文字を取り「和夫」にしようとした。ところが父は文字の義で匹夫の「夫」よりも「君子の徳は風なり」の「風」字が良いと教え、「和風」（はるかぜ）になったという。

前年から日報の編輯人志賀泰吉が入獄中で、仮編輯人の彼が社外寄稿掲載で官吏侮辱罪に問われ、17年7月まで4ヶ月秋田県監獄本署で入獄することになった。出獄直前秋田日報は解散した。19歳出獄後、19年県会書記や会議記録者をした。当時の県会について、昭和になってから「最近のような動物園のような県会とは違う」と語つた。

21年（1888）23歳の1月15日上京、神田で下宿し入学準備をして一橋高等商業入学を目指したが、英語聞取の力が不足で果たさず、22年1月東京商業学校第一期生として入学する。講義には余り出なかつたが、俳書購入や内藤湖南との交友など有益な日々で、蚕関係業の御法川商店のアルバイトで生計をたてた。4月秋田市制が施行され、父和市は市議員3級に当選した。国税納入額により1・2・3の3階級に分かれて各10人ずつ選出された。

24年（1891）1月卒業した和風は御法川商店大阪支店に勤務した。3月父は榎山三枚橋に移住したが、大阪では商店と関係のある岐阜出身者の阪井という老人が和風に惚れこんだ世話で、堀本阿

*秋田県立博物館

以19歳と8月に結婚する。27歳であった。新婚夫妻の顔見せに帰秋した9月、郷里の人々の考えて大阪に帰任しないことになった。大阪支店の在職8ヶ月であった。10月県内務部の雇となり、翌年市の書記となったが間もなく辞職する。

26年1月28歳で南秋田郡会書記、2月郡役所雇になった。10月第四十八国立銀行に入る。また29年2月に御法川商店の要請で上京したが、父が死去し2ヶ月で帰郷。30年（1897）7月長男静雄が生まれる。父は彼の子供の頃から朝野新聞の読者で「もう一度新聞記者になれ」と言っていたので、「秋田魁新報」を発行していた秋田新報社に31年5月25日入社した。先ず司計であった。32年2月に市会議員3級に補欠当選した。8月また御法川商店の要請で上京支配人に就任した。

33年（1900）35歳の9月母のいる秋田に帰った。そしてまた秋田魁新報社に再入社。今度は編集部に属し記者となる。34年3月市議に再当選し、10月には主筆となる。いよいよ我々の知っている新聞人和風の像が成立したのである。

新聞人になっても俳人の錬磨を忘れた訳ではない。37年（1904）12月『恋愛俳句集』（春陽堂）を刊行し、翌年『閨秀俳句選』（同）、翌々年『俳句逸話』（同）を刊行するなど、これからも続いて成果発表の実を示した。42年（1909）春には第1回魁旅行が日光・名古屋・古市・笠置山・京都などを巡り行われた。古市は伊勢であるから参宮も目的であったと認められる。43年には第2回が鎌倉・奈良・四国などをも加えて行われた。42年には『類題五明句集』（内外出版協会）も出版された。

大正に年号の変わる時期彼は秋田監獄にいた。明治45年（1912）5月15日の第11回総選挙で井上広居魁新報社長を推し、当選を勝ち取りながら違反事件があり、責任者として禁固2ヶ月になって6月6日から入獄したからである。8月6日出獄した時はもう明治ではなかったのである。だが、翌大正2年3月自身の市議選挙では当選を果たした。

大正5年（1916）8月四男五百枝が生まれた。11月には県立秋田図書館に『俳句大観』ほか多数の本を寄附した。その後も寄附を続け、「しぐれ庵文庫」（1957部）になる。6年4月秋田市長になった井上広居に代って第13回総選挙に憲政会から立

候補し、政友会田中隆三元代議士に惜敗した。7月に『俳諧新研究』（中央出版協会）を刊行。翌年12月母イク（70歳）が逝去した。大正8年秋田魁新報創立二十五周年並びに壱万号記念を迎えて、東京帝国ホテルと秋田県記念館で祝典を挙行。10年（1921）には55歳で宮城（皇居）拝観や富士登山を行い、11年には3月15日初運行の上野青森間急行に乗り、4月上旬に奥羽本線急行乗車上京を初体験する。明治生まれ秋田人にとって急行列車上京は新時代痛感の出来事であったろう。

大正12年1月25日秋田魁新報の発行所は、株式会社秋田魁新報社（資本金10万円）に組織替えした。常務に選任された彼は主筆にして編集局長を兼ね代表取締役になった。社長は置かなかつたので、名実共に秋田魁の顔になったのである。5月7日から30日まで、第11回全国記者大会と京城・奉天・大連で開催された東亜新聞記者懇談会に出席するために、3週間の朝鮮・満州旅行をした。これが影響したのか6月5日脳溢血の病に罹った。数え年58歳であった。いうまでもなく夫人は必死で看病に当たった。本人の病気をこの看病は救ったが、夫人には挽回できないダメージをもたらした。看病疲れから翌13年11月14日朝胆石を患って52歳の生涯を閉じた。戸籍名は秋田で受理される際に誤聞されたのか「アキ」であったが、本来は「阿以」すなわち「あい」で、藍問屋の実家と関係する名前であったという。

多少の不自由はあったのであろうが、新聞人としても俳人としても活躍を続ける和風に、昭和2年（1927）5月15日、秋田県内の俳壇有志がその還暦を記念して、「文勲碑」を川尻総社神社の境内に建てた。その俳句寿碑には「稲妻や水にうなづく薄の穂」が刻まれている。家庭の生活環境を考えての上であろう、12月家庭の事情をよく知っているお手伝いであった藤原えつと再婚した。翌3年11月27日秋田魁新報社社長に就任する。

昭和5年（1930）7月来秋された久邇宮邦英王（後東伏見侯爵）に石橋旅館で「蘭画を中心とした秋田藩の西洋思想」の講演を、9月6日賀陽宮恒憲王・敏子妃に女子師範学校貴賓室で、「奥羽鎮撫総督府と秋田藩の勤王」の講演を、同月17日東伏見宮周子大妃に石橋旅館で「司馬江漢以前の秋

田蘭画(洋風画)の沿革と秋田藩の西洋思想」について講演した。当時皇族に対するこのような講演は「御前講演」と称していて進講は大榮譽であった。この年7月30日秋田魁新報社工場が竣工した。

昭和6年(1931)4月『秋田の土と人・土の巻』(秋田郷土会)、7月『秋田の土と人・人の巻』(同)を刊行し、7月15日秋田魁新報社の本館竣工、20日若槻礼次郎首相(男爵)を迎え社旗掲揚式を行った。8月21日澄宮(現三笠宮)崇仁親王に石橋旅館で「秋田の蘭画を中心とした秋田藩の西洋思想」について講演した。澄宮は翌日仙北郡の払田柵跡を県知事の案内で探訪され後藤宙外の現地説明を受けられる。10月3・4・5日魁新報社は社屋新築落成式を行い、5日『秋田勤王史談』を、11月10日『裸』という和風歌集を、共に郷土会から刊行した。翌年4月5日『秋田五十年史』(同前)を刊行した。5月2日県教育会から郷土教育功勞の感謝状を受けた。

ところでこの5月15日に「五・一五事件」が起きた際には、軍の横暴に毅然として批判の立場を貫いたのである。秋田の聯隊の皇道派将校の中には露骨な威嚇行動を取る者もあり、新聞社の聯隊出入門鑑を召し上げたりする嫌がらせをしたが、和風社長が屈することはなかった。真の秋田勤王の伝統を身に帯していた新聞人・俳人・郷土史家だったのである。「文章報国。蹈正勿懼」の社是と一体であった。7月9日には伏見宮博義王に小林旅館で「秋田蘭画を中心として秋田藩の勤王について」の講演をしているし、12月には『秋田人名辞書』(秋田郷土会)を刊行している。

この人名辞書に関し一つの挿話がある。先ず訂正でジョイナスで配布した「年譜事項」では、昭和42年既刊の『新聞人 安藤和風』の年譜に従って7年に人名辞「典」刊行と書いたが、後に口頭で訂正する機会があったように、辞「書」であった。また辞書には「タカシナテイボウ」なる人物が載っており「(高階貞房)和学者、久保田の人、号菅園、稱平吉、鞞負、本居太平門にして伴信友と交はる、二子大山重華、三子橋本宗彦、著書『おほまあらし』天明四年九月廿四日生、弘化四年四月二日歿、年六十四」と説明されている。筆者が初めてこの高階なる人に関心を持ったのは昭

和56年に「秋田における平田篤胤」という文章を書いた時である。平田が養嗣の鉄胤に書いた手紙に「高橋」「高はし」「高橋ユキエ」「ユキエ」などと書かれる人物が出て来る。この辞書も含め諸書を勘案すると、高階鞞負貞房以外に該当者はいない。佐竹藩士の家に生まれ郷土史に詳しい新聞人が、同藩の君側の重臣だった家の氏を読み違える筈がないと考え、平田が父子間の手紙を他日他人に読まれても差支えないように仮名的に階を橋に文字換えしたのであろうと、平成6年の「秋田に於ける平田篤胤と鞞負」という文章では解して置いた。ところが古典的な氏で高階の訓みは「たかはし」であり、『秋田人名大事典』も平成12年版では、昭和49年版の高桑と高須の間に排列していた貞房を、「たかはし」の位置に改めていた。貞房の高階は、この人名辞書でいえば「タカハシテイボウ」とあるべきだったので改めて言及しておく。

昭和8年10月27日東久邇宮稔彦王妃聡子内親王に、石橋旅館で「秋田蘭画と秋田藩の和魂洋才について」の講演をし、翌9年1月個人月刊俳誌「句」を発行し、紀元節には知事から社会教化・地方文化の功勞で表彰された。9年に秋商を卒業勸銀に入行という五百枝氏も結局父君と同じ新聞人俳人になる。昭和30年前後初めて秋田魁新報社安藤文化部長と相識した。32年頃の或る時來秋の考古学者伊東信雄東北大学教授に、一知半解の「安藤次長は和風の長男です」という紹介をした。若造を慮ってか「違う」とはいわず「三男です」と名刺を出されたように記憶する。今にして思えば次兄が夭折しておられたことから「三番目です」といわれたのかもしれない。

昭和10年(1935)新聞功勞者表彰を11月日本電報通信社から受け、11年1月句集「残り葉・第一」(秋田郷土会)を出し、7月12日秋田市制記念日に鈴木安孝市長から「市制功勞者」として表彰された。そしてこの年12月26日71歳で世を去った。

28日午後1時秋田魁新報社葬が行われ、昭和41年、東京千鳥ヶ淵公園の「自由の群像」にその名前が記された。

瀬川清子

民俗学者瀬川清子は、明治28年(1895)10月20

日（21日説もある）秋田県鹿角郡毛馬内町^{ふるした}古下35ノ1岩船源太郎・スケの長女に生まれ、本名キヨ。29年1月7日生母死去のため、30年3歳の頃から継母イマに育てられた。4歳頃から同居の叔母に勉強の指導を受け、42年3月毛馬内尋常高等小学校を卒業した。翌43年3月には準教員養成所である教員検定準備場を卒業した。9月に免許状を得て毛馬内尋常高等小学校に勤務し、それから宮籠、錦木、毛馬内各小学校に勤めた。

大正4年（1915）12月尋常小学校本科正教員の免許を得、毛馬内小学校訓導になった。その後平元小、小坂小、平元小と訓導勤務をし、大正6年10月10日大湯村（大湯が町になるのは昭和3年）大字大湯の士族瀬川三郎と結婚した。夫の三郎は大正4年に秋田師範学校本科一部を卒業した教員であった。その同窓会の『旭水会』の平成5年発行名簿によると、故人である瀬川三郎のアドレスは東京都新宿区東大久保2-20になっているが、瀬川夫妻は大正11年（1922）4月に彼女からいえば姑のかつを伴い上京したのである。

11年4月30日東洋大学専門部倫理学科に入学する（鹿角市の先人顕彰館の資料では「東洋文化科」で、教員免許状は「家庭科」である）。大正14年卒業（先人顕彰館資料による。博物館資料では13年卒になっている）し、川村女学院に勤務する。鹿角の花輪出身である川村竹治と明治31年に結婚した（旧姓武田）文子夫人が院長で、13年4月に開院した女学校で、須磨弥吉郎夫人はな女史も教員だった学院である。14年に女学院高等女学科が長崎村に開設され、彼女は昭和2年（1927）まで勤務した。

昭和2年東京市立第一中学校（後に都立九段高校になる）に転ずる。同校の校長に招かれたのだという。授業嘱託として漢文を教えた。今風にいえば講師というところであろうか。研究者としては時間を得易くなったことであろう。

昭和8年（1933）柳田国男の研究グループ「郷土生活研究所」に参加した。女性では最初の所員であった。8月には石川県能登半島で鳳至郡輪島町海士町で漁村の漁と行商の調査をし、七ツ島で若連中などの調査をした。以後の瀬川民俗学の方角を示すような調査研究活動だったといえる。

9年（1934）8月千葉県君津郡亀山村若者組などの調査をした。海拔300mの折木沢村落で講中や足入婚などについて調査した。善光寺、伊勢神宮、金比羅山、出羽三山などの信仰があったことを明らかにする。香木原^{かき}という21戸から成る農山村では製炭業のことを調査した。場所は現君津市内である。能登で海村ここでは山村が対象である。

10年には印象深い調査をした。画期的ともいえる。場所は愛知県北設楽郡^{したら}振草村で、柳田の姪である神話学者松岡静雄の娘かつみと同行した。女性が出産と生理の期間別に生活する「忌屋」の調査などをした。信州に続く山村で昔からの生活習慣が残っていたのであろう。小屋あがりに際しては寒中でも川で洗髪し洗身し、洗濯もする。忌屋には母屋の煮物は持ち込まないし、家族と食事をする前には家族以外の人と合火（同火）をすることになっていたという。彼女は女性への差別について深い批判の理念を形成したと思われる。

11年8月には香川県三豊郡^{みとよ}五郷村^{ごごう}で祭・講・忌などの調査をした。今の^{あむ}大野原町^{みしま}に当たる。12年7月山口県阿武郡見島村で氏子、若者、婚姻、親類、講・厄などの調査をした。12月には千葉県安房郡千倉町を調査した。この年「日本民俗学講座婦人座談会」（のち「女の会」）の中心存在となる。

13年（1938）3月静岡県加茂郡南崎村で氏子、元服、若衆組などを調査した。今の南伊豆町である。7月三重県志摩郡長岡村などを、8月愛知県知多郡^{はづ}幡豆郡の三河湾に浮ぶ島々を調査した。長岡は現在鳥羽市に入っている。海村調査は彼女の一つの主要な仕事であることがわかる。14年（1939）8月広島県豊田郡調査。愛媛県伊予郡松前町を調査した。重信川流域である。8月などが調査期間になるのは学校の夏休みを利用するからであろう。12月には京都府海岸部を調査するのも冬休みを利用したのであろう。丹後の海村でも家の数が増えるのを嫌うとするが、これは農山村も同じ傾向であろう。15年3月福井県坂井郡北潟村・丹生郡国見村などを調査した。北潟村は北潟湖^{きたがた}の地であり、国見は今は福井市に含まれている。

大東亜戦争と称されていた第二次大戦が厳しくなった昭和18年（1943）一中から永年勤続功労表彰された。東京都制施行によって設立主体が変っ

たからであろう。一中を退職するこの年は戦況の影響に依るのであろうか、東北の調査が特徴的に行われる。3月岩手県下閉伊郡大川村を調査した。有名な岩泉の竜泉洞の近く、県下一の大きな村でありながら人口は3000、水田は皆無で畑が戸に一反歩に過ぎず、農村といいながら牛を飼い炭を焼き、蚕を飼う村であり、山林から枕木を産出するぐらいが特徴であった。

4月には宮城県牡鹿郡女川町を調査した。江島の鯨漁に関する研究なども視野にあったのであろう。前年『海女記』を出した彼女は本年は『販女』を発表した。鹿角市の先人顕彰館の資料では昭和18年大妻女子大学非常勤講師になったとある。博物館の資料にはそれはないが、明治41年に大妻コタカ女史が開いた私塾の技芸学校が高等教育機関の大妻女子専門学校になったのは昭和17年なので、非常勤講師であるとすればこの専門学校であろう。なお大学になるのは昭和24年である。

昭和19年（1944）1月には新潟県岩船郡上海府村を調査した。下海府村もあり、下海府は府屋・勝木などで昭和30年に山北町になった。上海府は早川とか間島とかで昭和29年に村上市に入っているが、「おなご衆宿」などの調査をし、嫁入前日に女性は歯を黒くすることなどを記している。戦争が厳しい状況になる中で東北や北越が何とか調査し得る地区であったのであろう。

戦が済んで昭和21年（1946）11月にもやはり東北福島県大沼郡新鶴村の調査をし、婚姻のことについて、結納には草履付き下駄が来ると記録、履物は持参しないが五銭で下駄を買っていく。婚礼の際2晩は送ってきた人と一緒に寝て、夫とは別であることなどを記録している。22年民俗学研究所評議員となり、いよいよ学界に重きをなす。

23年（1848）11月にもやはり東北の福島県で、田村郡山根村を調査する。古くから常葉郷とぎわに属し、近世会津領、白河藩預り、三春領と変遷もあったので民俗的にも特徴があったのであろう。昭和30年に常葉町と合併する地域である。さらに双葉郡久之浜村を調査する。『若者と娘をめぐる民俗』の調査をしている。また宮城県牡鹿郡で荻の浜村の田代島で男は漁に女は農に関わる生活を調査している。「田代」とはここでは開墾すれば田地に

なる土地の意味だという。

24年も東北で3月に青森県下北郡東通村尻屋の女の集り宿などを調査した。4月の調査も東北の秋田県であった。多分これが県内最初の地域調査であろう。南秋田郡脇本村が対象であった。いうまでもなく昭和29年3月に男鹿市になる村である。オヤカタ（親方）、ワカゼ（若勢）、メラシ、マグサ（秣）場、祭のトーマエ（頭〈統〉前）などの調査をした。そして12月に富山県射水郡堀岡村の調査をようやく行う。戦後社会も余裕を持てるようになったのであろう。昭和28年に新湊市になる場所である。最初の調査の能登に隣る北陸の地に、何か思いがあったのかもしれない。

昭和25年（1950）3月には、昭和11年にも赴いた四国にまた赴く。3月愛媛県上浮穴郡久万町、北宇和郡三島村を調査した。久万町は明治34年まで久万町村であった。三島村は宇和島市の東隣で昭和30年広見町となった。そして7月には長崎県上県郡峰村を調査した。古代の郷名では三根と書き、明治41年まで三根村と書いた。山里・中里・下里・三根浜などに分かれる。この調査を行ったのは「八学会」で後に地理学が加わって「九学会」になる各分野の総合調査で、対馬の「命婦」という女性神職のことを瀬川女史も深い関心で調査したらしい。東北でいえば「いたこ」にも近く、宗教学的にはシャーマンで、日本語では「巫女」になろう。この命婦は社家の奥さんであった。峰村は昭和51年町になった。

昭和27年8月また能登の輪島を調べ、この年と翌28年北海道胆振・白老・日高沙流・釧路白糠などを調査した。不動さんと火神アペフチを重ねることや、月水を男に見せると男が汚れるという信仰などに注目し、ほとんど明治に生まれたアイヌの人々が塩・味噌・砂糖による味などの本土文化に接した衝撃は、明治時代に日本人が西洋文化に接した以上に甚しかったと、『女の民族誌・そのけがれと神秘』（東書選書58・昭和55）「アイヌの女性」の章節に記し「あじましい」という前時代の東北語を使用することも記している。

30年（1955）奄美地方の九学会（人類・民族・民俗・宗教・社会・考古・心理・言語・地理）調査があった。お盆には豚の大切りや刺身、お酒など

先祖に御馳走を供える。だが士族は精進料理であった。お祭はアソビなのである。南島では月水の忌みなどはないと記録。34年には沖縄調査を行った。ここでは月水の変調は神籠のあらわれとさえ考えられており、祭りは女神主ノロによって行われ、ユタという占い人がいるなど本土とは違うことを知った。35年(1960)大妻女子大学教授となる。

40年(1965)3月鹿角市大湯で丁内のことやワカグミ(若組)のことを主として調査をする。43年には大妻女子大で永年在職感謝状を贈られた。昭和18年の非常勤講師から25年になる。44年には夫の元東京学芸大学教授三郎(75)死去。遺志により母校大湯小学校に図書・遊具購入に100万円を寄附した。『沖縄の婚姻』を刊行。47年には『若者と娘をめぐる民俗』を刊行。49年大学退職。

51年(1976)ミクロネシアのポナベ島・トラック島などを探訪した。出産・月水時はイマニカット(月経屋)に入る風習など文献で知っていたことを記し昔嫁入婚だったのに今はアメリカナイズされて嫁入婚だなどと書いている。54年には福岡県玄海町を調査し、海女の元祖の地といわれる旧鐘ヶ崎居住者で最後の海女といわれる人の話を聴取した。この年にも大湯小学校に瀬川文庫購入基金200万円を寄附した。55年アメリカ「エイポイント社」から「女性教育年度賞」を受賞。56年『女の民俗誌—そのけがれと神秘』で第20回柳田国男賞を受ける。その奥付に「東洋倫理文学科卒」と学歴が記されている。

58年立山文庫を継承した「十和田図書館」に民俗学関係の書籍・雑誌が寄贈された。そして昭和59年(1984)2月20日の朝に目黒区八雲3の20の10愛弟子吉田志津宅で89歳(満88)で逝去。3月16日付毎日新聞には、大妻女専の教え子である岡田照子岐阜女子大学助教授(後、教授・学部長)の「先生は古くて新しい“家族とは”“女の生き方とは”について大きな研究課題を私たちに与えられて静かに去られた」と文章を結ぶ追悼顕彰文が寄せられている。岡田氏は東北大研究生であったことの縁であろうか、筆者の先輩でハイティーンの寮生活以来指導を頂いている宗教学者重精^{しげきよ}文学博士夫人であり印象深く拝読した。

鹿角は周知の内藤湖南博士はじめ民俗学関係の

内田武志など多くの個性的な学者・研究者を輩出しているが、明治12年(1879)柴内に生まれ花輪高等小学校卒業後八戸に移住し、四高から東京帝大を出て東京人類学会の幹事役を果たし、5回に及ぶ南樺太調査で業績を挙げ、昭和15年(1940)世を去り毛馬内誓願寺に眠る「謎の人類学者」石田収蔵が、本項を終えるに際し思い合わされる。

中川重春

明治23年(1890)6月16日船川港町比詰羽立に文之助・トヨの長男として生まれ祖父順治重保によってであろう順吉と命名される重春の、生家中川氏の祖は、丹波の亀岡出で佐竹氏の客分だったというから、明智の家臣であったのかもしれない。順治は城下手形西新町士族小野崎藤兵衛次男で中川文蔵の娘クラと結婚し、明治13年頃手形から羽立に移住し、呉服商と宿屋を経営した。

比詰羽立は江戸時代初期の羽立すなわち新立村落で、海が近いのに漁業権がなかった。手形中川家には羽立夏井家の娘が行儀見習いに来ていてやがて養女になり、その縁で頼まれた由で、順治は46枚の漁業鑑札を入手してやった。比詰羽立の三吉神社には「中川顕彰碑」が建っており、曾て碑面が読めた際には、時務に明るく、庁事を熟知している人物と書かれていたという。庁事とは県庁事務の意であるされる。村人の礼金は受けずに季節ハタハタを年に4こも(薦)32貫毎季受けたという。漁民への励ましだったのであろう。

明治18年20歳の文之助は城下鷹匠町下田家出の18歳のトヨと結婚した。順吉には重秋、重利の弟と4歳下の妹サトとがいたが、彼は比詰小学校に入り船川小学校に転じ、明治35年頃秋田市の明德小学校を卒業し、37年(1904)4月県立第一中学校に入学した。明德小は手形谷地町に黒沢宇左衛門重測が開いた家塾^{しにょどう}四如堂を享けているという。黒沢は金岳陽の弟子で、四如を号とし数百人の門人を育て嘉永4年69歳で世を去ったが、その後明治13年西宮長之進藤長(端齋)が塾を再興した。

中学生の順吉に39年3月26日重大結果を招く突発事件が起った。天徳寺で中学を26年卒の先輩で日露戦争で戦病死した前沢軍曹ら8人の慰霊祭があり、全校参加で彼も参列していた。席を外して

手形住の長谷川弁護士所有の自転車を乗り回し、あろうことか羽立まで40kmも走行したのである。退学処分となり上京した。大森区山王の医師の書生になったとの説もあるが、準備のうえ早大専門部政経科に入学する。滞京中であった級友の加賀屋兼蔵と親交。後に青崎氏となる加賀屋氏（昭和43年79歳没）は1年ほどで帰秋43年3月中学を卒業する。同級に多田等観・古村精一郎などがいた。その後日譚では順吉は兼蔵の羽織袴などを勝手に入質したりした程自由にしていたという。新聞投稿の「啄木を思う」などに重春の署名をするようになる。42年4、5月には魁新報にも寄稿しているが44年の春には大学を止め帰郷したものかと考えられている。だが挫折したのではない。

44年9月樺太庁第一部長の宗家で立命館を創立理事長になる中川小十郎を頼り同庁嘱託となる。自身で厳格な父に「樺太に追われた」と書いていが、米国帰りの技師塚越卯太郎のもと木材干溜工場勤務をし、後の首相加藤高明長男厚太郎が高校生で来樺した際1晩歓談し交友の緒を開いた。大正元年（1912）末に小十郎が台湾銀行副頭取に転ずるのを機に1年4ヶ月の樺太生活で帰郷。2年6月25日親類後藤政義家の生後2週間の5男順吉を70過ぎの祖母クラの養子に籍、同じ屋根の下に同名が住むのを理由に改名し正式に重春になる。

2年10月「父を超える」大実業家を目指し、男鹿で薪発電を考え父外8名で会社設立を申請したが政友会の森知事が拒否。しかし3年4月第2次大隈内閣になる。早大出の坂本知事や同窓井上広居代議士の存在もあり事態は動く。中川利久氏の教示によれば先祖は神戸の方から来住の由の山形県楯岡町細梅三郎代議士の妹光代17歳（勘六・タニ5女）と4年（1915）2月に結婚するが、新妻の嫁入着物を那波質店に持ち込み、紋があるから200円だというのを「中川の将来も評価しろと」談判350円を得て上京、大正天皇即位大典などで上洛中の首相を追った。雄弁の大隈にはぐらかされ、万策尽き台湾行きを考える中、加藤青年の偉い父親のことを思いつき、外相官邸に電話で確かめて便したら厚太郎に招かれ、外相と井上代議士の紹介状で通信相に会うことができ、10日後に許可を得、正式指令は県庁から受けた。

彼に金を出すのはという雰囲気では株が売れず、自分の持分も加藤外相から融資を受け、厳しい父に頭を下げ井坂直幹への紹介状を貰う。井坂は4万5000円と社長とを提供した。彼は常務になるほかなかった。お礼であろう加藤子息が友人石田と12月30日中川邸に招かれ正月を迎えた。滝川の地主目黒家に移り1週間ほど大森円助猟師が案内したが厚太郎は「腕前未熟」を自認の猟果だった。

大正5年（1916）3月長女礼子誕生の喜びの中に、彼の実業家としての第一歩となる船川電気設立がこの年に成り、井坂も取締役に就任。翌年配電開始となる。6年秋田の中川本家筋の財政が窮迫宗家小十郎から600円を借りた。担保は天正10年6月10日付の明智光秀から中川撰津守に与えた美濃国内6郡の宛行状の直筆文書だったという。

7年4月北浦電気を合併、8年3月に倉庫業・船舶業・回漕業の中川合資会社創立。石炭を三菱へ納入することに成功。これも加藤高明から岩崎小弥太への紹介状があったからである。そして中川は本領を4月に発揮して船川一小樽間に月3回の定期航路を開設する。そして10月には郡会議員になり、政界にも乗り出したのである。若い頃から髪が薄かったと聞くが、時に男30というところである。10年第一次大戦後の諸物価高騰で船川築港計画が縮小変更され、船に関わる事業拡大に制約も生じたが、東京京橋区支店と小樽出張所を置いたり、翌年信用販売購買利用組合を町に設けて昭和2年3月まで続く組合長の任に就いたりする。

大正12年（1923）には4月船川一樺太間に年10回の定期航路を開設した。企画は知られていたであろう。既に正月3日船川港に入った西羊丸（700屯）船長の福島県出身前波善作が、27日付で押しかけ社員になった。彼は名幹部として活躍昭和15年暮れに60代半ば常務取締で世を去った。9月1日大震災にはお茶の水から東京への電車の中で遭遇した。前日夜の急行で上京神戸に向う途中だったのである。上野の山で1夜を明かし帰途につき苦勞して3日に帰秋し4日の魁紙上で中川の談が報道された。その後は復興輸送で業務は盛況となった。三菱から買い取った木材で10万円近くも利益が上がった。この年父も乗り気であった県会議員に当選した。

13年（1924）3月加藤厚太郎と北欧旅行の約があったが議会の日程で果たせなかった。彼は肋膜炎になり長女礼子は看病などで大奮闘をした。14年2月敦賀発でウラジオストク、ハバロフスク、ハルピン、長春、大連、清津、元山、京城を旅し4月下旬帰朝した。2月17日夜急行で東京に出発したが、前年末誕生の次女由紀子は生後50日余であり、妻と10歳の礼子が見送ったのである。

15年には1月父を失い、また加藤高明首相を失った。これから政界では町田忠治に接近することになる。東北の海運王といわれる本領はいよいよ発揮されウラジオストク―七尾―伏木―新潟―船川―小樽の定期巡航船の航路を開設し、町会議員の補欠選挙にも出て当選する。さらに8月1日には定期客貨船昌福丸で山形県人2名を含む32名のウラジオ視察団を編成し、船中にオルガンを積み込み11歳の長女礼子も加わって視察を執行、11日に帰国した。裏話的になるが昔は24～5万だったウラジオの人口が当時は12万余で、ホテルに32人前の食器がなく、帰国のビザもなかったと記される。

帰る際も中国人写真屋の時間がかかり乗船1時間前やっと間に合い、8月9日正午出航の昌福丸は11日午後4時七尾港に入り、和倉温泉で解散式、13日夕刻帰県したという。この年船川の泉台51番地に一部三階建の洋風602平方mの豪邸を建てた。天童木工の老名工が彫刻を担当総工費は3～5万円で藤山雷太（愛一郎父）が『制海荘』と命名した。惜しい哉昭和53年9月22日夕全焼した。

昭和に入ると不況になり、常時7～8隻チャーターしていた船が回転できなくなり、人員整理を行い社も丸ビルから芝浦に移転、菅原金之助・前波善作ら幹部のみが残った。弟重利や重秋それに宗家小十郎に助けを求め、自分の船を持てと説かれる。対応して資本金45万円の中川汽船を設立し船川合同運送を創始した。船川が第二種重要港湾に指定の朗報もあったが、12月28夜チャーター船大日山丸862屯が伏木から船川に回航中天王江川沖で難破し、翌日機関士は松林で凍死体が発見されたが、他の19人全員は行方不明になった。

昭和3年（1928）3女純子が誕生。船川丸1050屯を浅野造船に発注した。鶴見の同造船で進水したのは4年2月26日で、命名者津下日本石油専務の令

嬢とし子が金斧で断綱した。時速12ノット当時最高のタンカーは日石専属になった。秋田信託会社土田万助社長から約50万の融資を受けたというが、150人の来賓はその土田貴族院議員・佐竹義理男爵・住田正一国際汽船専務などがいた。

住田専務は鈴木商店にも勤務していた。大正11年頃日石の依頼で新潟・秋田産原油を運ぶため鈴木からタンカー宝鈴丸を借り、さらに14～5隻も鈴木からチャーターしていた中川と親密で、昭和10年6月には中川汽船非常勤取締役になる。この人は瀬戸内地方出身東大法科卒の海事学者で、『廻船式目』『海事史料叢書』などの著述があり、海運史の大家だった恩師古田良一博士の講義に度々登場し、学生時代から馴染んだ名である。昭和22年4月から24年12月まで東京都副知事になる。

5年2月28日晴れて船川が開港、税関支署も置かれ砂糖移入場にも指定された。中川は育英の面でも男鹿琴湖会長として「誓の御柱」を立てる。7年に長男重喜が、10年には次男重光が誕生する。

経済恐慌で鈴木商店が再建不能になり、昭和10年町田商工相に頼み財界の巨頭森広蔵安田銀行副頭取から100万円貸与を受け、羽立丸1250屯を三菱重工横浜ドックで造り11年3月25日進水した。命名は町田大臣で、古稀の母トヨ以下家族全員が出席実践女専を卒業直後の長女礼子が金斧を執った。彼は2月20日の総選挙に当選したが選挙違反容疑で拘留中だった。7月16日同ドックで貨物船男鹿島丸2225屯が進水次女由紀子が銀斧を執った。結局無罪だったが、この年は二・二六事件があり、翌12年4月30日には林銑十郎首相の解散の選挙で当選。9月1日パリの第33回万国議員会議代表（9人）で出席する。この年船川港町長に就任して、14年5月1日男鹿大地震に奔走した。10月光代を伴い郷土部隊慰問も兼ね朝鮮・満州の旅をし12月5日神戸に帰着した。中国視察は3年連続という。

15年（1940）勲四等瑞宝章受勲。16年秋渋谷に久邇宮家仮御殿2000坪購入27室の広大さ。17年5月横綱昇進の照国が土俵入をしたが、その前月に大政翼賛会選挙の中で非推薦で総選挙に出馬3選達成。この17年9月17日には秋田港湾運送を創立初代社長となる。18年2月15日資本金20万円従業員35人7012戸配電の中川電気が東北配電に強制合

併、20年4月には渋谷の御殿屋敷が空襲で全焼する。

軍の徴用で船は皆沈み、タンカー羽立丸と男鹿丸が残るのみで終戦となったが、21年(1946)4月10日定員8人に41人立候補の総選挙で、和崎・丸山に次ぐ3位で連続4当選の栄を得た。7月逓信政務次官となる。22年1月公職追放となるが25年10月解除第1号となる。戦後只の人となった加藤厚太郎旧伯爵を中川汽船相談役に迎えた。29年4月弟重秋らの努力で初代男鹿市長となる。汽船は整理し31年神戸船舶に合併。33年市長引退。翌年市政功労者。35年胸像が建てられ存在感不減である。

昭和37年渋谷の1190坪を売却。所有者光代夫人は松下幸之助に次ぐ長者番付2位になったが、財政は必ずしも潤沢ではなかったらしい。昭和38年(1963)11月中川の病状悪化し、4日空路神田淡路町同和病院に入院したが、翌日夜11時45分74歳で逝去。従四位勲三等旭日中綬章を受ける。

成田為三

明治26年(1893)12月15日北秋田郡米内沢村薪炭業和郎・ミツ三男として生まれ、29年山本郡響村仁鮎に転居。母の実家と関係があるというが、幼い日から火災で米内沢の住居が三転したことも理由だという。商売が不振だったのであろう。33年4年制だった小学校に入学、良く出来たが唱歌が得意ではなかった。入学は米内沢小だとか小学生でバイオリンを墓場で練習していたとかという話は、偉人伝に付きものの説話であろう。父は役場で収入役、長兄は郵便局勤めで、家は「ヨネジャ(米内沢)の店」と呼ばれ駄菓子などを商った。37年3月22日仁鮎尋常小学校卒業。

次いで二ツ井尋常高等小学校に進み、袴を着けて舟で通学し算術が得意で何でも1番という成績だったという。41年3月高等科卒業、北秋田郡立鷹巣準教員準備場に入り翌年3月卒業して秋田県師範学校に入学した。翌43年8月長兄の死去により家は米内沢に戻った。音楽に開眼したのは釜巻清三・沢保次郎など教諭の影響があった。同級生の大守善治(故人、和洋高校元校長)も学年が進むにつれて音楽の才能を高めたと言ったと資料(あきた さきがけブックNo.6)にある。学校に1台しかないピアノの学習も特に許されたという。

大正2年(1913)3月本科第一部を卒業。鹿角郡毛馬内尋常高等小学校訓導に月給17円で赴任。翌年3月末広小学校に転勤発令されたが、受持の児童達が彼の後任をボイコットしたと教え子糠塚英次郎が語ったほど(同上ブック)慕われた。末広に赴任せず東京音楽学校甲種師範科に進学した。

かくて音楽家成田為三は第一歩を踏み出したが、NHK土曜夕方の『みんなの童謡』でも人気があり、二胡奏者のチェン・ミンも「日本の童謡は人の心を優しく伝える。二胡は人の言葉のようで、自分の子供の頃を思う」と語る名曲《浜辺の歌》が、大正5年(1916)頃に作曲される。まだ作曲科が置かれなかった学校で彼は独乙帰りの教師山田耕作(耕筰になるのは昭和5年以後。山田は伯林で矢島出身斎藤佳三と同宿だった)に作曲を学んだ。6年音楽学校卒業佐賀師範学校に義務教生として教諭兼訓導の任に就く。教え子は楽典の学習と先生が含嗽薬の壺を下げて来たことを印象深く覚えているという。7年正月辞任して帰京。

大正7年(1918)10月1日セノウ音楽出版社から《浜辺の歌》の楽譜が竹久夢二の装丁で出版された。5年頃に音楽学校の牛山充講師に林古溪作詞「はまべ」(『音楽』4の8、大正2年8月所収)という作曲用試作品に作曲を奨められて完成したという。2年後輩の女性ピアニストへの恋が背景にあり、「いとしき〇〇に捧げる歌『はまべ』」という形だった由。森吉町の「浜辺の歌音楽館」案内パンフレットには、楽譜の夢二の絵が載っている。

8年4月『赤い鳥』の鈴木三重吉のすすめで赤坂小学校訓導となった。新装で日当りの良い音楽教室に籠って終日勉強していたという。先ず西条八十「カナリア」に曲をつけ名声を得、雨・赤い鳥小鳥・りすりす小栗鼠・ちんちん千鳥・お山の大将など『赤い鳥』専属として著名詩人たちの詩に芸術的で優しくロマンチックな曲を付け、当時小学唱歌しかない世界に異彩を放った。コロムビアレコード吹き込みの児童童謡歌手たちにも、厳しい指導をするが、うまく行くと一人一人を抱き上げて喜んでくれる優しい先生だったという。

童謡作曲の名声だけでは不本意であった。泣いて別れを惜しむ児童を後に10年(1921)1月14日神戸出港マルセイユ上陸伯林に留学しロバート・

カーン教授に師事する。東京秋田県人会の支援もあり、甥家助談では台湾で途中川村竹治の援助も受けたとあるが、川村の台湾勤務は明治42年からと昭和3年からであるので、これが事実なら川村は台湾旅行をしていたことになる。それにしても小松耕輔が訪ねたら軍人の留守宅である大邸宅に美人のハウスキーパー付きで住んでいたという。経費は相当だと考えられるし、毎月2日に郷里の母にきちんと送金を怠らなかった事実などから、鈴木三重吉が援助者は自分で日本円の力の大きさが役立った旨述べていたというのが当てよう。大戦後独乙で円が強かったことも、彼の『赤い鳥』の仕事の収入も事実であった。

学習の成果は、昭和60年国立音大で61年後に演奏されるまで日本では聞けなかった名曲で、大正13年6月作曲の「二つのロマンス」のような作品となったが、気になるのは深酒を続けたことで、成田顕彰最大の功績者後藤惣一郎浜辺の歌音楽館終身名誉館長は「四年間の厳しい勉学の中であって、やはり異郷にある孤独感と寂寥感から敏感な神経を眠らせるには酒しかなかった。そして時々、泥酔に近い飲み方をし、在独邦人の間には、酒乱という噂が飛び交った。」(前出ブック)と述べている。しかし、佐賀でも薬壇を提げていたといい、赤坂小学校でも一升壇が含嗽薬で、しかもうがいして吐き出すことはなかったというから酒好きだったのであろう。14年(1925)1月帰朝した。

8月には大館町男子・女子両小学校主催音楽講習会が開かれた。故郷が帰朝者を迎えたのであろう。15年2月童謡集『ころころ蛙』刊行。4月26日34歳の彼は、滝野川の苗問屋鈴木紋右衛門・くま長女淑徳高女卒の文子と結婚した。この時禁酒し終生守ったという。明治39年生の21歳の妻は13歳年下であった。湯沢出身の井上源吾夫人が琴の稽古に通う文子を評価し世話したものであった。旧家鈴木家の屋敷内に新宅を構えた。後藤名誉館長談によれば、文子夫人は清潔感満ちた美人で教養豊かな女性であったという。昭和2年(1927)2月『創作童謡』第一集・第二集を刊行し、6月秋田県内で作品の発表を行った。4日「成田為三氏作品発表音楽会」(秋田魁新報社主催)が秋田市県記念館で開かれ、5日本荘町、6日能代港町、7日大

館町、8日毛馬内町、9日花輪町、14日横手町、15日角館町と続いた。知名度も高まる。

しかしこの年に白秋の「砂山」の詩に附けた曲は、詩のところにマッチした合唱曲だったので、既に中山晋平の馴染の曲があったので平成5年(1993)まで演奏されなかった。そのように、彼の曲は格調がありすぎたのかもしれない。

3年4月川村文子の川村女学院の講師になり、彼の作曲した校歌が昭和9年の同学院「創立十周年記念祭」に発表されることになる。この3年には前田小学校・土崎商業学校の校歌を、翌4年3月には能代の淳城第一小学校の校歌を作曲する。

昭和5年(1930)10月10日秋田商業学校の、30日船川尋常高等小学校の校歌を作曲する。そして彼にとっても県民にとっても極めて重大な曲も作った。10月30日にあの《秋田県民歌》を作曲したのである。また翌年小松耕輔と共編で『新日本小学唱歌』(第十集まで)を刊行した。県人合力である。この6年には東京音楽学校教務嘱託になったと『音楽年鑑』にある。

8年3月宮城県登米郡北方小学校の校歌を作曲したと、そのことを調べた後藤名誉館長談で聞いた。この年4月には東洋音楽学校講師になる。翌9年には横沢小学校の校歌を作曲した。他にも年月など確かめなかったが聖霊中・高校の校歌や横手栄小学校の校歌も作曲している。

音楽著作も進み昭和10年(1935)には『和声学』を、11年には『樂式』『樂器編成法』を、12年には『和声学の基礎』を刊行する。独乙で学んだ和声と対位法とが彼の中で熟成されて著述になったのであろう。15年には女声合唱曲『すみれ』を刊行する。16年4月には、大正15年に発足した「東京高等音楽学院」教授に迎えられる。昭和22年国立音楽学校になる名門である。尚この学校が国立音楽大学になるのは昭和25年のことである。

このように成果を挙げていても戦争は無惨である。昭和20年(1945)4月13日の東京大空襲により、滝野川の自宅は焼かれ一切を失うのである。21日には米内沢の実兄宅に疎開した。終戦になり8月18日に復員した後藤惣一郎青年は、帰郷するバスの窓から和服の夫婦がポンプで水汲みしているのを偶然に見かけた。「一枚のネガフィルムに

なっている」成田為三像だと語った。阿部牧郎に「浜辺の歌」という雑誌小説があり、為三がみじめな在郷軍人一等兵に描かれている。勿論文学のフィクションだが、田舎生活が彼に合わなかったことは当然であろう。8月27日帰心矢の如く帰京の途に就く。阿部の小説では車中で病み駢をかくことになっているが、実はちゃんと都下町田町(市になるのは昭和33年)の玉川学園に到着した。

小原国芳から学園の新時代に向けての教育に力を尽してという期待の挨拶があり、受けて張切っていたというのに、29日の午前10時39分学園女子寮の1室で、脳溢血の為逝去した。享年53歳、満では51歳10ヶ月の今から見れば若い急逝であった。玉川学園講堂での葬儀には玉川学園と国立の音楽学院の合唱隊によって「浜辺の歌」が捧げられた。後日米内沢龍淵寺に埋葬される。

昭和22年(1947)「浜辺の歌」が中学校の、「カナリア」が小学校の音楽教科書に載った。愛弟子の国立の岡本敏明教授が文部省図書編集委員としてこの輪唱曲に日の目を見せたのだという。そしてこの歌と共に為三の名は広く世に知られる。31年、指導主事だった後藤名誉館長が山田耕筰郎(世田谷)で「秋田の方々はもっと成田為三君を大切にしなければならない」と言われた。その故か32年10月29日には米内沢に顕彰碑が建ち、岡本教授率いる国立音大と地元の力で年忌毎に追悼演奏が行われ、44年9月未亡人と地元とが墓誌を建碑し、52年仁鮎小学校に「成田為三先生勉学の地」と記された碑が建てられ、昭和55年9月29日顕彰の集い、61年9月3日国立音大合唱団の小山章三教授指揮による追悼合唱が行われた。63年(1988)8月10日米内沢に《浜辺の歌音楽館》が建設され、平成5年(1993)10月30日「生誕百年」の催しが県と町の手で行われる。

晩年亡夫作品の印税で静岡県引佐郡細江町の「浜名湖エデンの園」で暮らしていた未亡人は、平成12年(2000)逝去し米内沢の成田の墓に葬られた。後日譚を一つ。当時の岩城町前川町長は「浜辺」は道川海岸として碑を建て、対して大友秋田県キャンプ協会会長は異を唱え下浜海岸だと主張する。そして後藤名誉館長は阿仁川の岸だと断言する。筆者思えらく「『浜辺の歌』の浜は、

歌う人の思いに依る」と。

伊藤永之介

余りにも印象的な『山美しく人貧し』というこの有名な農民文学作家の碑文が、高清水公園に立っている。初めてその作品に接したのはこれも有名な『警察日記』の頃である。だがこの文学者の秋田における活動は大正時代の初めから始まった。

明治36年(1903)11月21日秋田市西根小屋町末町(通称池永小路)に、祐蔵・ムメの五男として生まれた。妹があり可愛がっていた。その妹清子は画才に秀れていたが若くして亡くなった。本名は栄之助で本籍は北秋田郡上小阿仁村小沢田にあった。祖父が秋田に移住し広小路で菓子屋を営みパンを製造、一時は成功したが永続させず、骨董屋なども営んだが家計は豊かにはならなかった。

明治43年(1910)中通小学校に入学し成績抜群であったという。友人は中等学校に進む者もある中で高等小学校に入り、大正7年(1918)卒業した。高等科でも友人とガリ版刷りの「朱雲」という文芸雑誌を作った。伊藤紫明の名で「日本少年」などの諸誌に投稿したりして文学少年の本領を発揮していた。教科書の夏目漱石の『草枕』を抄録した「峠の茶屋」に刺戟を受けて小説家を志したと伝えられている。

卒業した年の8月に日本銀行秋田支店の見習行員となった。彼の日銀入行について初めて知ったのは、平成初年の頃の永沢和夫日銀支店長から行内史に関する本の該当部分のコピーを見せて貰った時であった。近くの石川書店で菊池寛・芥川竜之介などの作品や、ロシア文学に熱心に接したという。新潮社が翻訳文学出版に力を入れるようになった頃のことである。9年日銀を退職してしまう。

図書館通いを始めるのである。広小路の東根小屋町角にある県立秋田図書館は、当時東根小屋町にあった秋田中学校の生徒の目も多いところである。中学生たちは寮の裏側にある家から精励図書館通いをしている彼を「文学兄ちゃん」と呼んだという。ニックネームは揶揄よりはむしろ長髪の同年代人に対する敬愛の称だったのであろう。彼の熱心さに対して図書館側も便宜をはかるようにな

ったという。機械的に公平の原則を掲げるであろう時代よりも人情味溢れる便法の利く世だった。

翌10年（1921）3月後藤宙外や児玉花外がいて、後に新秋田新聞社になる秋田時事社に入社した。その前月、土崎で「種蒔く人」が創刊された。この文学青年が先駆的な文学活動から刺戟を受けたことは疑う余地がない。北村光の名で、自紙にも競争相手の秋田魁の紙面にも、文芸批評から社会評論まで発表していた。当時の秋田の文学風土が文学青年に対し大きく作用を及ぼしたものと考えられる。創作にも励み、3月国民新聞懸賞小説に本名で応募した「酒」という短編で一等に入選し賞金10円を受け、同人誌にも短編を多く発表した。

こうなるとやはり中央に出たくなるのが常であろう、大正13年（1924）1月彼も今野賢三の紹介状を持って、新進作家金子洋文を頼り上京し洋文が妹と住む代々木の金子宅に40日程同居した。今野の方が先に上京していたが、後から上京した金子が東京に居住し文学活動を続け、作品「地獄」が評価されたのに対し、今野は活動写真の弁士として、大正5年以来東京での活躍のほか故郷の秋田・土崎・能代などで働き、併せて政治活動をしていたので、伊藤がその紹介状を得ることができたのであろう。大震災後の東京で2月にやまと新聞社に校正係として入社、金子のすすめで7月には「文芸戦線」に「新作家論」を発表、犬養健をとり上げた。彼の評論は好評で、新感覚派川端康成や横光利一の「文芸春秋」や「新潮」からも依頼されるようになり、活躍の場が広がった。

そうなると、秋田で轡を並べていた人々の心を掻き立てる。魁新報の記者柿沼不泣・松井善四郎も負けじと上京したが、柳の下の鯛ではないが誰にでも好运があるわけではない。光を浴びないまま若くして他界したという。伊藤の成果は彼が努力家で「一步また一步と積み上げていった」（『秋田の人々』）からだと武埜三山は評した。

22～23歳で評論家として名を成したが、大正13年（1924）9月伊藤永之介の筆名で「文芸戦線」4号に短編「泥溝」なる佳編を発表し、翌々年「文芸市場」に再掲されて世に迎えられた。昭和2年（1927）一時帰秋し11月数え25歳で和崎ハル女史の長女輝子と結婚する。執筆一筋の彼は貧困も気

にしなかったが、夫人は金も米もなく何度も母の膝下に戻り、ハル女史に諭されて夫の許に帰ったという。3年3月には労農芸術家協会に正式加入し7年の廃刊まで「文芸戦線」編集に関与活動する。

4年12月に同誌に銀行勤めの体験も生かし「恐慌」を発表する。思えば世界恐慌真っ只中の時期である。そして秋田ではこの4年夏に綴方教育の成田忠久の「北方教育社」から「くさかご」（第4号からは「北方文選」と改称）が7月に刊行されるのである。人間としては12月長女ちさ子の誕生に恵まれる。昭和5年（1930）は「暴動」の作品で認められた年である。3月に千葉県保田に転地療養するが、「文芸戦線」に「総督府模範竹林」、「中央公論」に「平地蕃人」など植民地ものと称される綿密な作品を発表した。彼の目は植民地問題を深い想いで見ていたのである。

9月18日には満州事変もおきている昭和6年は、凶作であった。それに関しても彼は深い想いで見ていたのである。「万宝山」を書き筆力を発揮、翌7年（1932）7月に「文芸戦線」は廃刊になる。8月に「春遠し」という小作農民の苦しさを書いた小説を「国民新聞」に発表した。凶作に苦しむ東北農村のことを心にあたためていたのである。彼の争議ものといわれる系列作品も農村の小作問題を考えることと関連していることは明白である。

昭和10年（1935）石川達三が『蒼氓』で第一回芥川賞を受けたが、伊藤は11年1月には「小説」という同人誌を創刊した。この年3月に「人民文庫」創刊号に発表の五城目出身の矢田津世子の『神楽坂』が第三回芥川賞候補になった後を受け、8月「小説」に発表の、〈どぶろく〉にからまり労役場に送られた夫と、飢に見舞われて自殺する妻など悲劇を扱った農村小説『梟』が、第四回芥川賞の候補になる。鳥ものが始まったのである。この作品は第六回の同賞候補にも上げられた。

13年（1938）6月には、農婦ミヨが家に飛び込んで来た鶯を禁鳥とも知らず策をかぶせて捕らえ、警察署に売りこみに来た場面などに、生き生きと秋田弁を写実的に使った作品『鶯』を「文芸春秋」に発表、ユーモア性もあって注目された。その前月に刊行の『鴉』とともに第七回芥川賞候補になったという。10月長男一生が誕生、翌年

『雁』『鳴』『鶴』などを連作する。そしてこの昭和14年4月に角館出身の佐藤義亮の新潮社が設けた「新潮社文芸賞」の第二回に選ばれた。豊田監督で映画化もされ杉村春子・清川虹子らが出演し、文壇における地位が定まり、それまでの赤貧を脱することができたという。なお『鴉』は凶作の農村から女工になり紡績工場に、さらに水商売に売られる女性たちの悲しみを扱っている。

昭和16年（1941）3月には数え年4歳の長男を疫病で失ったが、9月には『石川理紀之助』（新潮社）という伝記小説を出す。長男の行方を追って千島にまで渡り、その遺骨を抱いて帰郷した老農の気持ち genuinely が本当に理解されたことであろう。12月8日米英との戦争になる。翌年1月次男日出夫誕生、心も和んだことであろう。7月には『平田篤胤』（偕成社）も書いている。そういえば彼の上京を紹介した秋田県人作家今野賢三は昭和14年『佐藤信淵』を、18年は『前田正名』を書いている。伝記文学は時代思潮と関係があったのかもしれない。

18年には東京の戦時下で急迫した生活を避け、平鹿郡横手町に疎開する。20年5月には親しい作家鶴田知也も疎開一緒になり、農民文学資料の現場を実体験する。鶴田は伊藤と「小説」を創刊した仲で、九州出身ながら北海道で酪農も体験し、昭和25年に帰京するまで、戦後秋田の労農運動に大きな足跡を残した作家で、アイヌ史を扱った作品『コシャマイン』で第三回芥川賞を受けている。

19年1月に三男晴之助が生まれる。農作業などをしてきた伊藤は7月から10月にかけて徴用され陸軍報道班員として中国に渡った。長沙方面の湖南作戦の為だったというが、農村の実態を取材したようである。昭和21年（1946）9月の戦後初の作品『雪日記』（新紀元社）にはこの時の中国体験が生かされているという。

同23年（1948）1月には鶴田・武埜三山・千葉治平らと同人誌「秋田文学」を始める。そして3月に秋田市に移り保戸野の和崎家に寄寓する。五城目を初め県下に広く探訪していたが、11月に単身帰京する。とはいっても戦災後の東京は転入制限があったので、埼玉県志木町に居住する。翌24年1月にやっと都内の世田谷区深沢の弟祐蔵宅に同居することになった。3月には「雪代とその一

家」（「群衆」）を発表し、いつも犠牲になっている雪代の半生を書く。日本農業の救いの無さを直に描いたこの作品は次号の合評で注目された。農村生活の体験と密着した観察に基づく農民文学の作品の一つである。9月に同じ世田谷区の北沢に転居し、娘ちさ子が上京して一緒に住む。

昭和25年（1950）1月渋谷区上原1144に転居したが、4月には夫人と2人の息子が上京一家揃った。

9月には同所1226に住居を求め、夫人の意向を容れた普請をして転居した。これから10年間は夫人も安心できる一家の生活であった。でも彼の派手嫌いは変わらなかった。分銅志静「五城目と永之介先生」には、「昭和二十五年頃ではないかと思う」として、青年の会が町に呼んだ舞踏家井内恭子が遇いたいといい、青年達が会場に来てくれるように頼んだのに、とうとう姿を見せず、後で訊ねると「あんな派手な色彩のところへ出ると、今の小説が書けなくなるんだよ」といったとある（秋田県教委『伊藤永之介』昭和60）。

26年（1951）に「文戦作家クラブ」を結成その中心的存在になる。「文戦」は昭和28年には「社会主義文学」になる。彼は社会主義文学者ではあったが、政治とは一線を画していたという。

27年4月あの秋田県南にモデルがあるやに見える一本木署を舞台とした「警察日記」が「農民文学」に発表される。森繁久弥主演の映画が久松監督で作られ、名子役二木てるみも評判になるが、何よりも作者永之介の名が広く知られた。復員した農村青年が土地所有をめぐる悲劇を招く「なつかしい山河」（「改造」）を5月に発表し、28年11月「電源工事場」（「新潮」）で戦後農村の変化を描写し、10月「五郎ぎつね」で第二回小学館児童文学奨励賞を受け、29年には鶴田や丸山義二・和田伝らと「日本農民文学会」を結成し会長になり、迎合なき作家活動をひたすら続けた。この年7月に「狸」（「群衆」）、11月「はたはた」（「文学界」）を発表する。

30年（1955）ちさ子が結婚し近くに住むことになった。やがて孫史夫が彼のアイドルになる。大きな安らぎだったのであろう。31年（1956）決定版『警察日記』が出版され、秋の芸術祭参加の映画（日活）も好評だった。9月には中国に文化使

節となるが、中国ではこの文学者を自由主義者と見て歓迎しなかったし、逆に翌年渡米しようとしたが米国からビザが出なかったという（分銅志静「農民に傾けた善意と愛情伊藤永之介」）。33年（1958）「消える湖」（「地上」）を発表し、新聞小説「署長日記」が河北新報などに連載される。

昭和34年（1959）2月集団就職少年を扱うNHKのラジオドラマ「ともしび」の取材に帰秋、若い秋田文士を川反に連れ出し、分銅が「師という意識は微塵もなかった。彼を訪れるものは、すべて文学の仲間であった」（『秋田の先覚』）と評している通りの調子で痛飲した。体調のこともあって、病と死を極端に怖れる心情に依るものとの見方もある。5カ月後の7月22日夕刻5時、自宅二階の書齋で上京した少年の就職斡旋状を書きつつ倒れた。脳溢血だった。26日朝6時前逝去57歳だった。

27日1000人の参列する告別式があった。金子洋文は「こんこんとしてつきることのなかった善意の泉はついに涸れた」と喪主に代る挨拶をし、8月4日八橋全良寺墓地に埋骨。作家は故山に帰る。あの高清水の碑は、孤独なまでに自己に忠実に、チューホフを愛し、農民が読んでわかる農民文学を書き続けた文学者の一周忌に建てられた。

佐藤義亮

屈指の出版社「新潮社」の書籍が揃っている角館町の「町立角館図書館」の情報は周ねく伝わっているが、その源由は創業者佐藤義亮にある。明治11年（1878）2月18日仙北郡角館町岩瀬町で荒物屋を営む為吉の四男儀助は出生。16年小学校に入学し優等生で、12歳から和・漢学を学んだ。

明治24年（1891）角館高等小学校を卒業した。26年に神沢繁（素堂）が15年に開塾した秋田市の績善学舎に入学したが、専ら「筆戦場」などへの文学投稿に精出していた。28年（1895）3月我慢ができなかったらしく友人と上京してしまう。市ヶ谷加賀町の秀英社に就職、印刷機（輪転車）廻しの機械運転係になる。日給15銭（当時人足35銭・車力50銭）で「青年文」に投稿し、田岡嶺雲の辛辣批評もあったが、首位になったのが支配人の目にとまり校正係に抜擢され日給20銭になることができた。弁当などは市ヶ谷なので陸軍幼年学

校や士官学校の残飯の売品で済ました。当時の蕎麦はかけももり1銭5厘、銭湯も1銭5厘、床屋は5銭、神楽坂の上の床屋は7銭という経済状況の中で節約生活をし、学習は神楽坂上の盛文堂で立読みに励んだ。

29年7月新声社を興こし雑誌「新声」を創刊した。間借りをしていた社の印刷部長萩原鶴吉夫人お雪さんの資金援助だった。兎に角19歳の社長である。牛込区左内坂町の「六帖一間」が会社である。3号から「文界小観」で時評を書く。投稿以外は殆ど彼のペンネーム橋香の書いたもので、36年8月まで91冊刊行した。橋香は編集人でもある。地方支部も設けた。妖堂居士の名で「文壇風聞記」を書き評判を呼んだ。30年2月に秀英社を退社、金子薫園の紹介で神田の明治書院に勤めた。

30年6月明治書院も退社し一ツ橋通に家賃4円の一戸建を借り、9月1日愛知県矢作町中根四方吉の次女龍子と結婚する。矢作は昭和30年岡崎市に入る。31年郵便局をやめて上京した2歳年下の高須芳次郎と2人で幾つもの名を使って文章を書き「文章講義録」を刊行した。18歳の義弟中根駒十郎も事務に参加した。大町桂月・田岡嶺雲ら東大出身の執筆陣もあり、発行所「大日本文章学会」もつくった。32年数え年で桂月は31歳嶺雲は30歳であった。通信教授の卒業証書も出し、145円の収入を挙げ、3月に四六判142頁の『嶺雲揺曳』を、11月に『第二嶺雲揺曳』を出版した。また、27歳の河東碧梧桐の『俳句評釈』を出版し、印税の一部を5厘銅貨3600枚で18円駒十郎が持参したが、重すぎ二人で二階に持ち上げたという。

明治33年（1900）9月田山花袋の『ふるさと』を出版する時、著者自身が「損しないか、大丈夫か」と心配したという。「新声社」は神田錦町2丁目6番地土蔵付二階家に移った。家賃は18円で、平福百穂・田口掬汀など角館出身者の他に金子薫園・西村真次・一条成美などがいた。一条は新進画家で長野出身であるが、「明星」から高須が引抜いたのであった。8月31日長男義夫が出生。

34年3月10日『文壇照魔鏡』というザラ紙128頁25銭の小冊子が、与謝野鉄幹に不名誉な記事で、本人の疑義が「明星」に載る。新声社との間に対立が生じ、高須と発行人中根は告訴されたが証拠

不十分で無罪になった。34年1月から菊判を変えて四六倍判とした「新声」は、35年には1万部発行になった。1月の小栗風葉『梢の花』から「アカツキ叢書」も発刊される。表紙は一条成美・結城素明が書き、百穂も表紙・口絵を書き好評だった。ところが雑誌も書籍も好調だったのに、経営不振になった。放漫経営だったのである。掛取りを徹底するために駒十郎など各方面に出向き、九州では駅に宿泊したりまでした。

それでも好転せず元社員正岡芸陽の仲介で「新声社」は36年8月号を最後に森山吐虹の手に移った。森山はときどき休刊し乍らも43年3月号まで「新声」を出した。休刊で休養中債鬼は龍子夫人が一手に対応して呉れたが、彼は大金を盗まれた。社を手放した相当額の金が消えたのである。『新潮社七十年』に河盛好蔵が「単なる盗難ならば諦らめようもあったろう。さうでなかったから受けた打撃は、物質的にも精神的にも大きかった」と書いているように深い事情があったらしい。

37年（1904）1月10日次男俊夫出生。敷金250円を返して貰い牛込新小川町の家賃の安い家に引越して差額150円で仕事をし、5月に「新潮」第1号を新潮社から出版した。四六倍判80頁12銭であった。表紙は百穂の描いた大海の彼方水平線上に朝日昇りかける表紙絵で、「軍国の文学を見よ」と横書きされていた。社員は小僧1人であった。社務はすべて彼がやり、中根は兵役で資金集めもできない状況下、「大日本国民中学会」（講義録）の仕事を河野正義が発注してくれたし、広告の注文もしてくれた。かくて「新潮」第1号も売切れた。

旧同人高須・田口・金子らも戻り、若き中里介山ら投書家も来訪した。青森県出身の佐藤紅緑とその居候たちもよく遊びに来た。中に明治36年26歳で仙台から上京し紅緑の書生をしていた真山青果もいた。3月号に「零落」4月号に「決闘」の小説を発表したが稿料無しであった。でも紅緑の紹介で徳田秋声と知り合い、38年小栗風葉の手伝いもし、新潮社の雑用も手伝って、やがて40年（1907）5月（記念）号に「南小泉村」を発表地歩を得、12月単行本『青果集』を新潮社から刊行できた。

39年5月28日三男道夫が出生、41年4月には花袋・風葉編輯の『二十八人集』を出版し印税を病

む国木田独歩に贈った。執筆は四迷・藤村・秋声・白鳥・眉山・青果・風葉・花袋・芦花・有明・国男らで、545頁、1円30銭。独歩は6月23日逝去するが7月15日40人の談話集『国木田独歩追悼号』を出版し、青果とその紹介で入社の中村武羅夫22歳が筆記した『独歩病牀録』も出版する。

42年相馬御風『父と子』（ツルゲネーフ）・若杉三郎『近代文学訳註叢書』（ロシア・フランス篇）・翌年御風『貴族の家』（ツルゲネーフ）など翻訳物に社が乗り出す。44年（1911）にはしかし笹川臨風『南朝五十七年史』のような本も出した。大正になって2年（1913）1月には生田長江の評論『死の勝利』を第1編に「近代名著文庫」を創刊。8月牛込区矢来町に初めて邸宅を購入する。

大正3年中村白葉訳『罪と罰』（ドストエーフスキー）を出して翻訳路線を推進し、御風『人生論』（トルストイ）から「新潮文庫」を創設する。米川正夫『白痴』（ドストエーフスキー）・大杉栄『種の起源』（ダーウィン）・阿部次郎『光あるうち光の中を歩め』（トルストイ）・中村吉蔵『人形の家』（イブセン）などを世に問う。さらには6年には秦豊吉『若きエルテルの悲しみ』（ゲエテ）を第1号に「エルテル叢書」をも発刊する。

社運着々と展開し大正10年代を迎え、11年8月着手の社屋工事が12年8月末に完成した。9年から出していた「世界文芸全集」で宇高伸一訳『ナナ』（ゾラ）が良く売れたので、<ナナ御殿>と呼ばれたという。夕刻から行う予定の記念会は準備が済んでいた。ところが正午2分前あの大地震が起きた。祝賀会などは吹っ飛んだが、立派な新社屋はビクともせず10日から業務再開した。不偏不党を旨とする義亮の出版業は震災後の文筆者に救いになったと思う。10月26日父為吉82歳が逝去したが、12月30日孫亮一が生まれた。13年9月1日『子供達に聞かせたおぢい様の話』を刊行する。

大正14年（1925）日本初の完訳版『資本論』が新潮社から出された。訳者高島素之が考えていた出版社が震災で駄目になったのを義亮が引き取って書物にしてやったのだという。15年には「社会問題講座」13巻の刊行も始めた。『演劇新潮』なども震災後に引き受けて大きな損失を招いた。同じく大赤字になった『婦人の国』も同郷の後輩滝

田樗陰に頼まれた義侠の刊行という、事業の為とは限るまいが、この頃深刻な胃病に罹っていた。

昭和2年（1927）1月30日「世界文学全集」38巻予約出版（広告を東京朝日新聞2頁大で出す）。体調不良でも全集2万ページを5校6校まで朱を入れ、「まだ鷗外や上田敏の亡霊に取りつかれている」と指摘し「読んで分かる翻訳」「美しい日本語になっている翻訳」を導き出した。富士印刷という専属工場を持っていたのでできた。彼がチェックした部分は読みや訳が指摘通り必ず違っていたという。昭和3年に三女和子と伊香保で保養したが、それでも1月「日本文学大辞典」に着手する。

昭和5年（1930）には4月「新興芸術派叢書」の刊行を始め事業意欲は一層旺んであった。この年5月にはあの評論家長江と同郷であり書生でもあった、詩人生田春月が投身した。7年6月「日本文学大辞典」の第一巻が刊行される。藤村作東大教授の申入れで商買を超越した学術文化事業として取組んだもので、完了するのは昭和9年5月になる。8月には「日の出」を講談社の「キング」を越えようとして発行したが、30万部中14万幾千部も返品される有様で、昭和12年ぐらいいまで不振が続くことになる。三女は8年に亡くなってしまう。

昭和10年（1935）11月「日本少国民文庫」の刊行を始めた。11年11月新潮社は「創立四十周年記念祝賀会」を丸ノ内の東京会館で500名参会し催す。『新潮社文芸賞』を創設する。第2回の賞を伊藤永之介が受けるあの賞である。会の挨拶で義亮は「子供4人共に出版のことに熱意を持っている」と述べ、5月には『生きる力』という著作を刊行した。愛嬢の病気や自身の不健康とも関係したのか彼は「ひとのみち」の教団に入っていたが、この後もこれに続く『向上の道』（14年2月）・『明るい生活』（同年11月）などを刊行、「日の出」連載の修養講話を纏めて人生観を示した。

戦時を迎えた昭和12年になると暮から「日の出」が好調になり、13年暮の14年新年号では大入袋が出るまでになった。17年12月には保田与重郎『日本語録』で「新潮叢書」刊行を開始した。その好調の中でこの月「日の出」の祝いの宴を開いた翌日入浴中に倒れてしまう。第一線は主として長男義夫の掌るところとなった。翌18年4月同じく保

田の『芭蕉』で「日本思想家選集」を始めたが、戦況は急迫して来る。これが第二次大戦中の最後の企画となった。

昭和19年（1944）5月再度発作を起こす。脳溢血症であった。9月株式会社に組織替をして社長に就任したが、社務は義夫が担った。戦時最後の年昭和20年4月横手市の甥村上宅に疎開し、静かな生活を求めるが、5月25日牛込の邸宅や、伊藤整も社員だった会社の倉庫及び印刷所が戦災を受けてしまう。そして2カ月半敗戦の日を迎えた。

20年10月初め帰京する。3月号から休刊していた「新潮」を不屈不撓で11月号から復刊する。72頁で1円50銭であった。さらに疎開済の「紙型」を戻して旧作の重版も開始した。

昭和21年（1946）話題の「日の出」が廃刊となった。御時世ということであろう。結局「新潮社」自体も新体制が必要になる理窟である。2月1日義亮社長は退任する。中根駒十郎専務も退くことになり、社長は長男義夫、副社長は長孫亮一、専務は次男俊夫という陣営になった。5月10日には創業50年の挨拶があったが、秋田出身の出版人の半世紀の巨歩は、敗戦も乗り越えたのである。

体に不自由はあっても「やるぞっ」という気持であったろうが、翌22年公職追放の処置を受けた。『文章報国』がこの人の信条であった。他の戦前戦中人士が均しく味わされた占領政策の苦渋を主人公も味わった訳である。影響してか秋から病状が進んだという。『秋田の先覚』4に伊多波英夫氏は「ほとんど療養の床にあった。それでも新潮社の新刊文はすべてかれの枕頭に届けられ、もうろうとした意識のなかで愛撫したり『いいなァ』と賛嘆してやまなかったという。出版に全身全霊を捧げつくした男の、本の、印刷インクの香りへの執着だけで生きながらえた六年間だった」と佳文で叙述している。

昭和26年（1951）6月20日追放は解除された。喜び安堵したに違いない。8月18日午後11時58分74歳で逝去した。21日正午社葬が営まれた。青山墓地と郷里角館本明寺にお墓がある。翌年角館町農村モデル図書館の庭に佐藤義亮胸像が建てられた。